

岡山県医師会女医部会報

第2号

「今だから女医部会を！」

岡山大学大学院
医歯薬学総合研究科神経機能構造学分野教授 筒井 公子

高等学校の同窓生が集まる会合で、岡山県医師会女医部会会長の小山 武子先生から女医部会発足のお話を伺いました。女医部会立ち上げについて話される小山先生は、38年前、高校の先輩として医学部新入生の私を迎えて下さった時と同じく、輝いていらっしゃいました。「今だから女医部会を！」と力説される先生のお考えに心からの賛同を覚えました。

2005年3月のTIME誌に、「WHO SAYS A WOMAN CAN' T BE EINSTEIN?」の見出しで「男性と女性の脳に違いはあるのか、能力に差はあるのか」という古くて新しい命題の記事が載っています。ハーバード大学学長が2005年1月に行った講演の中で、「サイエンス分野で女性教授が少ないのは、1；女性は重要な地位に就くために要求される犠牲をはらう気がない、2；男性は高いレベルのサイエンスに対して生まれながらの才能を持っている、3；女性は旧態依然とした差別の犠牲者である、などの理由が考えられる」と発言し、大変な非難を浴びたことを紹介し、男性と女性の脳についての最新の研究結果を簡単に解説した記事です。男女共同参画社会のお手本と見なされがちなUSAでも、gender gapはhotは話題のようです。学長の講演の「サイエンス」を「医療」に置き換えて、「医療分野で働く女性医師が少ないのは……」とすると、今の日本でも騒然とした議論を誘発しそうです。TIME誌で紹介された研究結果では、「男性と女性の脳は構造上でも機能の上でも異なっている。しかし、優劣のつけられるものではない」、「男女を問わず、脳はpower of suggestionに弱い、若い女性が期待を寄せられ、励まされればすばらしい能力を発揮する」ことを示唆しています。

女性医師が、悲壮な決心で、数々の苦勞を乗り越えて医療の現場で活躍する時代はそろそろ終わりにしようとする機運が社会の中から湧いてきています。また、これからは、結婚、出産、育児は女性医師だけが直面する問題ではなく、男性医師にとっても深刻な問題となってきます。このような状況の下で、女性医師として誰よりも先を

歩いてこられた先輩達とこれから歩き始めようとする若い女性医師、問題を抱えて現在奮闘中の中堅の女性医師が女医部会という場で出会い、より良い将来のシステムづくりに参加していくのは、大変タイムリーなことだと思います。出来れば、「女性医師の直面している問題を考える部会」と拡大解釈をして、男性医師も多数参加した女医部会になればもっと理想的だと思います。女医部会のますますのご発展をお祈りしております。

カンボジア国を訪ねて

高梁医師会会長
岡山県医師会女医部会副会長 池田 元子

私共カンボジア訪問団は、11月20日ベトナム経由でカンボジア国に到着しました。

21日早朝、朝焼けの美しいアンコールワットを眺め、自然の美しさの中に旅の疲れを癒し、先ずは孤児院を訪問しました。日本女性と現地男性ご夫妻の経営で25名の孤児が在籍。学校の授業終了後は院内で日本語教育がなされていました。中年の日本人女性が一人一人に文法から会話を指導されており、異国での頑張りに頭が下がる思いでした。子供達も熱心に授業を受けておりました。この子供達の教育費は善意の寄付に頼っている由でしたので、私達も心ばかりの文具品と金一封を贈呈して、孤児達にエールを送りながら帰りました。

22日はタケオ州プライカバス郡プレイロベア高校に到着。図書館と、高梁医師会寄贈のプライカバス病院母子病棟竣工式に出席。パソコンセット、学用品、本箱、シャツ等々、多勢の方々の善意の品々を贈呈しました。当日の来賓は日本側、日本大使館地神参事官。カンボジア側はプライカバス郡副知事、タケオ州副知事です。式典終了後、英語と日本語のスピーチコンテスト開催。上位3名に表彰状と楯、賞品を贈りました。学生達は真剣な面持ちでキビキビと日本語を話し、明日に向かっての希望に輝いておりました。

昼食は病院長自宅へ招かれ、御家族や近所の方々と笑顔のあふれた交流ができ、満足な昼食タイムとなりました。

午後は里子との交流です。50名の里子達一人一人に文具品を手渡ししながら、日本から持参した紙風船で仲良く和気藹々と楽しいひとときを過ごしました。

最後は里子の家庭訪問です。片親、中には両親を亡くし、まことに貧しい掘っ立て小屋に住んでいますが、子供達はキラキラ光る瞳で元気に頑張っておりました。私共は貧しかった日本の終戦後の生活に思いを馳せ、この子供達が成人の暁には、日本とカンボジアを結ぶ虹の架け橋となることを、そしてそれぞれの国の発展に寄与してほしいと心から願い、悪路とおんぼろバスで腰を痛める3時間の帰路も何のその、元気

一杯、心満たされた1日となりました。

もっと医療に税金を

岡山県医師会女医部会副会長 清水 順子

私の父は田舎でただ一人の開業医だった。子どもの頃、両親と遊びに行った記憶がほとんどない。だから、私は勤務医になった。現在は、高齢者と在宅医療を中心とした診療所の所長として働いている。父よりましかもしれないが、有給休暇もほとんど取れない(取らない?)。病院はさらに忙しく、同僚に代診に来てくれと言い出せない。ゆとりのない毎日で、放ったらかしのまま大きくなった小6の娘からも呆れられている。こんなはずではなかったと思う日々である。

30歳で結婚、苦労した末に37歳で長女を出産。育休2か月目から、週2回の外来だけ子どもを院内保育園に預けて働き始め、育休5ヶ月目で職場復帰した。同じ頃、他にも3人の同僚が妊娠・出産。法人内で女性医師の会を作った。8割勤務の嘱託契約制度ができ、その後、何人かの女性医師が利用して働き続けている。

県医師会に女医部会ができるということで参加した。当初は、子どもの病気や行事の時に、ドクターバンクのような診療の穴埋めのサポート体制ができれば、という思いから参加した。しかし、いろいろな立場の女性医師の話を聞くうちに、今後増え続ける女性医師が、熱意をもって日本の医療を担い続けていくためには、当座のサポート体制も必要だが、システムを変えていくことが必要と思うようになった。

医療こそ、ゆとりがもっとも必要な仕事ではないのだろうか。病んでいる時こそ、安全で安心な医療を受けたい。今の医療現場は、ゆとりがない中で、安全と安心を作り出そうともがいている。本当のゆとりがなければ、本当の安全も心からのやさしさも生まれない。すべての医師がゆとりを持って働けるように、医師数を増やすことが最も大切なのではと思う。当面は、一人でも多くの女性医師が働けるための工夫をしてゆくことから始まるのだろうか……。

女性医師の働き方を考えることは、男性医師の働き方をも考えることにつながる。ひいては、日本の経済や政治を考えることにもつながると思う。難しいことはわからないが、日本の経済を圧迫しているのは医療費なのだろうか?国民が健康で、健全に仕事ができるように税金を使うことが、どうして日本の経済を圧迫するのかわからない。命を奪う戦争や軍隊よりも、一人の命を助ける医療のために、そんなに役に立っているとは思えない公共事業よりも、国民ひとりひとりが人間として大切にされるために、税金は使われるべきだと思う…。私だけ?

女子医学生との懇談会に参加して

岡山県医師会女医部会副会長 中島 道子

11月20日女子医学生と岡山県医師会女医部会との懇談会が開かれました。

岡山県医師会から、小谷会長・平野副会長・山崎担当理事と小山女医部会会長以下委員9名が出席。岡山大学医学部から3年・4年生21名(うち男子学生4名)が参加。

小谷会長のご挨拶の後、小山会長の司会で「女性医師の就労環境について」をテーマに予定時間を1時間超過する懇談がなされました。衛生学実習で「女医の子育て支援」のテーマでグループワークしている男女医学生の参加もあり、産休・育休後の復帰についての話題が多く出ました。

医局・病院の配慮をいただき、家族の支援を受けて、女性医師だからと甘えることなく今日に至った、頼もしい会員の経験談に学生からは「なぜ育休を取らなかったか?」などの質問が出ました。男性医師が育休を短期間とった例の紹介もありました。研修中の出産などの対応についても質問が出ました。「女性医バンク」についても話題になりました。小山会長から、「やりたいこと・やって欲しいことがあれば、声に出していきましょう。」と提案されました。小谷会長から、医師会の目的・構成・事業などの説明の後、清野佳紀先生の「子育て支援はボス(病院長)と旦那で決まる」が紹介され散会しました。

平成16年末の医師数調査で女性医師が初めて4万人を突破し、全体の16.4%を占め、29歳以下では35.3%を占めると報道されました。

女子医学生が医師になったあと、診療・研究に専念し、また一時の中断はあっても医業をやめてしまわないようにするには、男性医師の理解と社会制度の整備が不可欠だと思います。医師会から行政への働きかけを一層進めていかなければならないと思いました。

最後に平成17年8月11日急逝されました女医部会委員、木庭明子先生のご冥福をお祈りいたします。